

漢唐一里の長さ

森 鹿 三

桑原博士の「張騫の遠征」(東西交通史論叢所收)に漢と唐の一里にさしたる差違なきことを證明された後、漢唐一里の長さに就いて

グルナールはトルキスタン地方の實際と照して、漢時代の一里を四二〇メートルに換算し、ヘルマンは漢書西域傳に見えたる西域諸國の距離と現時の距離とを對比して、漢書の一里を四〇〇メートルに當てたり。リヒトホーフエンは主として玄奘の紀行を基礎として、玄奘の二百五十里は赤道一度に相當すると主張せり。之によれば玄奘の一里は約四四〇メートルとなるべし。されどリヒトホーフエンの材料は不十分の點あれば、漢唐時代の記録を對比して研究せば、唐の里長は今少しく短縮するならん。

と説かれた。(同書九〇頁) 桑原博士がグルナール、

ヘルマン説に傾かれるのに對し藤田元春氏は「尺度綜考」(二二〇頁)に於て

桑原博士の説はなぜ短縮するかとの確定的反駁ではない。グルナールやヘルマンなどリヒトホーフエン以外の支那學者の説を見られ、四四〇メートルの一里を少しく長いだらうと考へられたのであるらしい。しかし周尺八寸百八十丈一里のスタンダードから計算すれば四三六・三メートルとなるから、リ氏の説を過長だと一概に否定することは出来ないと思ふ。

とてリ氏説を支持された。桑原博士は漢唐一里の長さ何程なるかの實際問題に就き未だ親しく研究せしことなしと言つてゐられるが、藤田氏は里程の基礎となる尺度の研究から出發されてゐるだけに、その説には傾

聽すべき所が多い。前掲の文中にも周尺八寸百八十丈一里のスタンダードとあつて、まづ周尺を我が曲尺の八寸(二四二・四ミリメートル)と決定し、その千八百倍の一里は四三六・三メートル、従つてリ氏説を否定すべきではないといふことになる。この周尺は藤田氏の尺度表では第二類に屬し、隋書律歷志では王莽の時劉歆の作つた銅斛尺、後漢建武銅尺、晉泰始十年に荀勗が作つた晉前尺などが之に包括される。而して晉前尺を作る時、檢定に供した古器七品の中には銅斛や古錢があつた。それ故此等古尺の遺品のない時は銅斛・古錢等から周尺の實長は逆算し得るのである。

今この兩者を手がかりにして周尺の實長が、藤田氏説の如く果して八寸なりや否やを吟味しよう。馬衡氏の「新嘉量攷釋」(北平故宮博物院年刊所收)附録によると、この王莽の時の銅斛から算出した一尺は二三・一ミリメートル弱である。一方古錢に就いては藤田亮策氏の「樂浪封泥攷」(小田先生頌壽記念朝鮮論集所收)に王莽の時に鑄造した「貨泉」は徑一寸と定められてあり、樂浪出土の好良のものを計測するに直徑二三ミリメートルにして殆ど出入がない。

と述べられてゐる。この嘉量と貨泉の計測より得た結果によれば周尺の實長は我が曲尺の七寸六分に當る。(二三〇^{m.m}とせば七寸五分九厘、二三一^{m.m}とせば七寸六分二厘三毛)藤田氏の周尺八寸と四分の差がある。一尺に於ては僅かに四分の差ではあるが、その千八百倍の一里では七十二尺即ち二一・八メートル強の差となり、藤田氏の周尺八寸として算出された一里の實長四三六・三メートルより二一・八メートル短い四一四・五メートルとなる。かくて桑原博士の如くグルサールなどの説に加擔したくなり、藤田氏の支持するリ氏説はやはり過長といはざるを得ぬのである。

以上は嘉量や貨泉から間接に周尺の實長を考へたのであるが、次に古尺の遺品は如何といふに、スタインが長城の西の堡壘の中から得た實長九寸の支那尺がある。即ち我が曲尺の七寸五分四厘餘に當る。他の遺品に比して最も確實なものである。藤田氏も前掲書三二頁に指摘され乍ら、之をしも八寸に近いといふのみでその實長を考慮されてゐない。私ならばむしろ七寸六分に近いことを問題にしたい。藤田氏の周尺八寸説はその標準尺である晉前尺の長さを藤貞幹の好古目録に

「曲尺ノ八寸許ナリ」と記すのに依據されたやうである。(前掲書九四頁)しからはこの好古日録の記事に對し、既に百年前にその誤謬を指摘してゐる人のあることに注意せねばならない。日本藝林叢書所收好古日録の欄外に「周尺ハ曲尺ノ七寸六分ニ當ル」とあるのがそれである。この頭注を記したのは、かの本朝度量權衡考を撰した狩谷棧齋その人である。棧齋が周尺七寸六分と喝破したのは、決して放言ではない。本朝度量權衡考附錄上之上、晉前尺の條に

此尺後世傳ハラズ、其致ヘシ古器モ今知ルベカラザ
レドモ、王莽ガ銅斛ト錢トニヨリタレバ、其長サ曲
尺七寸六分ナルコト知ルベシ

とあるのから推しても、その用意の尋常ならぬ周到さが窺はれるのである。上述の馬・藤田兩氏の論考に見える嘉量・貨泉の計測を百年前の昔に行つてゐるのである。従つてその結果が一致するのは當然の明合である。棧齋の親友松崎慊堂も周尺の曲尺七寸六分なることを、その尺準考(卷一周尺考)或は慊堂日歷(天保九・十・十四)に於て述べてゐる。慊堂が棧齋の本朝度量權衡考を見たことは日歷(文政十一・一二・八)の左の記

事によつて明らかである。

棧齋來、示其度量考、極精、對讀。

しかし尺準考の成つたのは文政四年であるから獨立に同じ結論に達したものらしい。近頃では足立喜六氏も同じ方法で同じ結論を出されてゐる。(長安史蹟の研究二七頁以下)

以上は漢と唐の一里にさしたる差違なしといふ桑原博士の説を前提にして、周尺の實長から一里の長さを算出したのである。この長さは漢里には妥當するとしても唐里に於ては如何であらうか。一體に尺度は棧齋の夙に論證した如く訛長するものであるから、尺を基準にした里程に於ても長くなるのではなからうか。唐尺に就て棧齋は法隆寺所藏の尺八を計測してその一尺は曲尺八寸〇八厘三毛三絲三忽不盡に當ると言ふ。此は唐の小尺で、大尺はその一尺二寸であるから、曲尺の九寸七分に當る。棧齋のこの説に従つて唐の一里の長さを算出するに、小尺なれば曲尺の千四百五十六尺(四四一メートル)、大尺なれば曲尺の千七百四十六尺(五二九メートル)となる。茲に小尺とは周尺のことであるが、漢より唐の間に既に四分訛長してゐるのであ

る。又大尺は三分詛長して我國現在の曲尺になつた譯である。

顧るに一里四四一メートルと言へばリヒトホーフエンの説に合致するではないか。さきにリ氏の説はやはり過長といはざるを得ないと言つて置いたが、唐の一里(小程)としては決して過長とはいへない。むしろ妥當な數になつて来る。しかもその根據が唐人玄奘の紀行であると言へば愈々その説は確實さを増すのである。リ氏の材料に不十分の點ありとしても、唐の小程四四〇メートルといふ事は一應認めねばならぬ。一尺で四分強の詛長は一里に於て八十八尺(二六・六六メートル)長くなつたのである。かくて漢と唐の一里にさしたる差違はないが、グルナールの四二〇メートルは漢里に近く、リ氏の四四〇メートルは唐里に近いのであつて、僅かではあるが差違があるのである。グ氏は漢代の一里を對象にし、リ氏は玄奘の紀行によつて唐代の一里を述べたのであるから、孰れが是、孰れが非といふ筋合のものではなく、漢より唐に至る間に里程が詛長したために差違ができたのであつて、むしろ兩説共に首肯するに足るものと言はねばならぬ。

唐尺に關しては徳川時代以來議論があつて、その大尺を椶齋の如く九寸七分とするものゝ外、曲尺と同じとし又は九寸八分弱とする説がある。近頃でも關野博士は後者を採り(平城考及大内裏考二二頁)足立氏は前者に與さる。(前掲書三〇頁以下)この兩説に對して椶齋は本朝度考中に詳しく批判してゐるから茲には論及しない。足立氏は大尺を曲尺の一尺として、唐里は大程が曲尺の千八百尺、小程が曲尺の千四百九十九尺四寸とする。椶齋の考證より算出した里程とは五十尺前後の差があるが、小程は大約わが四町に、大程は五町に相當するといひうるであらう。而して大程は長安、洛陽兩京の城坊に適用されたのみで、一般にはなほ漢里の詛長した小程が用ひられた。唐末から宋代に至つて漸く一般に大程が行はれたのである。(足立氏前掲書四九頁)

漢唐一里の實長に就いては尙考慮すべき事が少ない。今は若干の前提の上に立つて、段落付けたのみで決して結末したのではない。具體的な事例による検討は他日を期したい。